

① 信州型仕分けは何に特色があるのですか？

16日の仕分け人による事前ミーティングの場で、構想日本の代表の方から次のような説明がありました。

「昨日の仕分けを見て感じたことは、『精通者』以外はまだ慣れていないから無理かもしれないが、自分の主張をしたり、政策の論議に走ってしまう。政策は議会で論議するものであって、仕分けは使われたお金をチェックする場だ。したがって、先のことを論議するのではなく、過去がどうであったのかに注目して欲しい」。

それに対して私はその場で反論しました。

「昨日の長野での仕分けをインターネットで見えていたけれど、特にB班なんかは、『精通者』の3人が発言するだけで、県民側の委員はまったく発言しない事業もあった。それは政策を議論させない進め方になっているから、発言できないのではないかと。事前に質問を投げかけて回答をいただいているのだから、仕分け人が質問して県側が回答するという対立軸を作るのではなく、みんなが同じ土俵に立って、これからどうしていけばいいのかという創造的な論議していきたい」。

それに対する代表の方の反応は、

「対立軸を作るなどというのは、メディアが一部分だけを誇張して報道しているのであって、国の仕分けの実態はそんな展開にはなっていない」。

それを受けて私は、

「昨年の方が実施した仕分けに1日張り付いていたけれど、この進め方ではだめだと思った。信州型仕分けも国の仕分けも同じではないですか」と言いました。

事前にこのような論議があったために、進行役のコーディネーターの方は気を使いながら進行をしてくれましたが、県の仕分け人（有識者・県民委員）は、「政策」に入り込まないようにということ意識しながら発言をしていました。

数字というのはあくまで結果であって、その結果は施策から生み出されたものです。この施策を「政策」と言うのかどうかはよくわかりませんが、構想日本が打ち出している枠にはめることが「仕分け作業」であるとしたなら、今後の発展の可能性は薄いと思います。

② 事前調査について

私は仕事の場においても現場主義を徹底させようとしています。つまり、そこに事実として何が起こっているのかということから、次の展開をスタートさせたいからです。

そのような捉え方から行くと、今回の紙の上のデータだけで判断することが心苦しかったです。今後は、仕分け人が事前に現場に足を運んで、できれば実務担当者ともやりとりをした上で、最終的な仕分けの判断ができるような運営にすべきでしょう。

③ マイクの配置の問題

これは想像にすぎませんが、司会者を通しての発言というルールをコントロールするために、手持ちマイクにしているのではないのでしょうか。したがって、真ん中に座った人なんかは、両方の人にマイクを手渡しする作業に追われていました。

そんなことよりもっと大事なことは、1対1の図式では質疑応答しかできなくて、議論にはならないということです。ひとつのテーマに全員が参加できるような、集音マイクの設定か、ひとりずつ襟に小型マイクを取り付けることを提案します。